

【報告】

就学前児童を対象とした企画展の開催
—奥州市牛の博物館「家族で楽しむ企画展」—

Exhibitions for Preschool Age Children
The Oshu City Cattle Museum's *Exhibitions to Enjoy as a Family*

川田啓介※ 内藤裕加里※※ 黒澤弥悦※※
高野教導※※ 山岸敏宏※※

Keisuke KAWADA Yukari NAITOU Yaetsu KUROSAWA
Kyodo TAKANO Toshihiro YAMAGISHI

Abstract :

Since 1998, the Oshu City Cattle Museum has held exhibitions for local children and their families, with the understanding that these young visitors are the museum's future adult supporters and visitors. These exhibitions have compared the characteristics of the twelve animals of the Chinese zodiac with cattle in other words, they have combined a topic of great general interest with one specific to the Museum. **Table 1** illustrates the exhibition dates, which have fluctuated somewhat but generally have been two months somewhere between mid-November and late January. This corresponds with the increased New Year's season interest in the zodiac. **Table 2** illustrates the nine points given special attention in planning and executing these exhibitions, decided upon after discussion with local preschool teachers. All of the exhibition materials have been handmade by Museum personnel. These temporary exhibitions have largely followed the pattern of the Museum's permanent exhibitions, but with toys and crafts near the exhibition entrance and a quiz corner to make them more attractive to children. **Table 4** illustrates the resultant marked increase in family and preschool Museum attendance during these exhibitions. In particular, because of the temporary exhibitions' simpler contents, many parents were observed explaining the exhibition to children, as were many children asking questions of their parents. Many people were also observed gathering

※ 元奥州市牛の博物館職員 新所属：奥州市教育委員会 ※※ 奥州市牛の博物館

information and materials for New Year's cards (which often feature the year's zodiac animal). This suggests that the exhibition, intended and planned for children, was generally well received by adults as well. It can be concluded from this that easy to understand exhibitions are likely to attract more visitors to the Museum. In addition, other events held in concert with these special exhibitions including rice-pounding and a reading and play about the zodiac animals sponsored by volunteer groups led to greater Museum attendance by individuals associated with these groups. In summary, these exhibitions have played an important role in encouraging Museum attendance and advanced use of Museum facilities.

はじめに

脳科学の発達により就学前教育の重要性が認識されたことを受けて、国外ではアメリカで1980年代からチルドレンズ・ミュージアムが建設されるようになった。わが国においても平成9年(1997)に開館したキッズプラザ大阪の開館を先駆けに平成17年(2005)にはアクアマリンふくしまで企画展「キッズアクアリウム」が開催されるなど、博物館における就学前教育の気運が高まりつつある。

牛の博物館(以下、牛博)では将来の博物館利用者でもある地域の子ども達に着目し、幼稚園教諭との連携の下、就学前教育に配慮したわかり易い企画展示(以下、子ども企画展)を平成10年度(1998.Apr.-1999.Mar.)から開催してきた。国内における比較的早い事例と考えられることから、この取り組みについて報告する。

1. 事業実施の経緯

牛博は平成7年(1995)4月に岩手県前沢町によって設置された公立博物館(平成18年2月の市町村合併により設置者が奥州市に変更)である。銘柄牛肉の産地として知られる人口1万5千人という小さな地方自治体が設置にあたって牛博に求めたことは、平成3年に出された建設検討委員会研究結果報告によれば「銘柄牛を継承するだけでなく、収集した資料を基に調査研究活動を行い、教育普及活動など来館者の要求に応える、生きた博物館としての活動を行う。」ことであった。平成5年には「いつでも、だれでも、気軽に利用できる、開かれた専門博物館」を建設することが基本構想に明記されている。そして、開館初年度にあたる平成7年(1995)に牛博職員による事業の検討が行われ、高齢者用プログラムとしては介護保険施設への移動博物館(川田ら2003)、子ども向け事業としてはバター作りや折り紙教室など親子体験教室の実施が決定された。この時、「誰もが楽しめる」ではなく、対象年代を絞り込んだ事業が考案された背景は、牛博が行政主導で建設が進められてきたいわゆる建物先行型博物館である(黒澤2000)ことと無縁ではない。

開館当初は地域住民からの反発があったことも事実であり、博物館を作るよりも畜産振興のための補助金を増額するべきという畜産農家の声は特に大きかった。そこで、牛博では地域の畜産

振興に関する研究を積極的に行うとともに（兼松ら1997, 1998, 1999, 川田ら 2003）、うし学講座の開催など対象を畜産農家に絞った活動を行うことで、箱物ではない生きた博物館であることを証明する必要があった。それは、博物館の存在に懐疑的であったその他の地域住民に対しても同様であり、牛博を地域の博物館として出来るだけ早く住民に認知させるために、最も効率の良い対象年代を絞り込んだ結果、幼児と高齢者に特化した事業が考案されることとなったものである。

牛博では、子どもの頃の博物館体験がその後の博物館訪問の動機付けになる（Falk and Dierking 1992）とされていることから、特に子ども向け事業に積極的に取り組むとともに、企画展示オープニングにおける幼稚園児の創作太鼓出演など、機会ある毎に小学校や幼稚園と連携をとり、その保護者をも事業の対象者として取り込んできた経緯がある。これらの事業は住民から一定の評価を受けたが、遠足として牛博を利用した幼稚園教諭などから体験事業やイベント出演だけでなく、子どもに親しみの持てる展示があったほうがよいと指摘されたことから、公立幼稚園教諭らの協力を得て、平成10年度から子ども企画展に取り組むことになった。

2. 企画展示のプランから実施まで

地方の小さな自治体が複数の博物館を建設、維持することは難しいことから、牛博は当初から郷土博物館としての機能も期待されていた。そのため、当初の事業計画は、ウシをテーマとする夏の企画展と郷土をテーマとする春の企画展示の2本立てであったが、子ども企画展の実施により、年に3回の企画展示を実施することになった。牛博の職員は、常勤3名（学芸員2、事務1）、非常勤1名（館長1）、臨時職員3名（受付2、学芸補助1）の7名であり、これまで企画展示を実際に担当するのは学芸員2名のみであったが、郷土の企画展の主担当を事務職員とし、学芸員がこれをサポートする形で負担の軽減を図った。企画展示のテーマは、開館当初に今後10年間の実施計画と主担当者を定め、その後は社会情勢や準備の進み具合によって、年度毎に調整を行っている。

企画展示の準備は、まず主担当者が情報収集と資料の所在調査などを行い、ストーリーの骨組みを作成している。しかし前述のように、牛博は職員が少なく、かつ全職員がひとつの事務室で勤務していることから、職員の間で日常的に情報交換が行われており、実際にはかなり初期から全員で企画展示を作り上げているとあってよい。しかし、予算的には次年度以降に開催する企画展示の調査費がつくことはほとんどなく、学芸員がこれまでに蓄積した情報や個人的つながり、出張のついでの調査などに頼っているのが現状である。

事業年度に入ると、主担当者は資料貸借関係の事務や解説書の作成などに追われることになる。そこで、平成18年度の子どもの企画展では、広報活動、資料輸送の段取り、展示作業など作業分担を行うことで効率的に作業を行った。また、全職員が企画展示の準備作業に集中するために少なくとも企画展示初日の10日程前から他の事業を入れないようにした。

Table 1 子ども企画展の名称と開催期間

企画展名称	開催期間
・子どもとお母さんのための企画展 「ウサギさんってどんな動物？ウシさんとくらべてみよう！」	平成10年(1998)12月12日(土)～平成11年(1999)2月14日(日)
・子どもとお母さんのための企画展PartⅡ「タツと恐竜」	平成11年(1999)11月20日(土)～平成12年(2000)1月16日(日)
・親子で楽しむ企画展2001「ヘビと仲良しになろう！」	平成12年(2000)11月18日(土)～平成13年(2001)1月21日(日)
・家族で楽しむ企画展2002「ウマ・馬・牛」	平成13年(2001)11月 9日(金)～平成14年(2002)1月20日(日)
・家族で楽しむ企画展2003「羊は牛ですか？」	平成14年(2002)11月12日(火)～平成15年(2003)1月19日(日)
・家族で楽しむ企画展2004「お猿さん」	平成15年(2003)11月19日(水)～平成16年(2004)2月22日(日)
・家族で楽しむ企画展2005「コケッココー」	平成16年(2004)11月25日(木)～平成17年(2005)1月30日(日)
・家族で楽しむ企画展2006「わんわん！&オオカミ？」	平成17年(2005)12月 8日(木)～平成18年(2006)1月29日(日)
・家族で楽しむ企画展2007「イノシシはブーと鳴く？」	平成18年(2006)12月 8日(金)～平成19年(2007)1月28日(日)
・家族で楽しむ企画展2008「ネズミにチューもく！」	平成19年(2007)12月23日(金)～平成20年(2008)1月27日(日)

3. 事業の概要

3-1 子ども企画展のテーマおよび実施時期

牛博のメインテーマであるウシは、十二支の動物のひとつである。牛博が開館した平成7年はネズミ年であったが、年度中にウシ年を迎えたことからテレビ局や新聞社から取材が殺到し、十二支の動物に対する関心の高さがうかがえた。また、平成10年度中に迎える十二支の動物はウサギであり、数多くの子どもの向けキャラクターが存在する。そこで、子ども企画展では十二支の動物を取り上げ、牛博の常設展示と比較することでそれぞれの生き物の特徴を理解させることにした。十二支の動物は、ネズミ、ウシ、トラ、ウサギ、タツ(リュウ)、ヘビ、ウマ、ヒツジ、サル、ニワトリ、イヌ、イノシシ(ブタ)であり、その多くが家畜動物であることから、その後も継続して子ども企画展で取り上げてきた。

開催期間は、ウシ年の取材が前年の11月から12月にかけて集中した経験から、変動があるがおおよそ11月中下旬から1月下旬までの2ヶ月間とした(Table 1)。この子ども企画展を期待しているマスコミも多く、平成18年度にはテレビ局5社、ケーブルテレビ局2社、新聞社5社による複数回の取材があった。東北地方に立地する博物館は降雪期である冬季に来館者が減少する傾向にあることから、この時期にマスコミに広く紹介されることは大きな意義がある。

3-2 事業の名称

牛博は登録博物館であるが観光型集客施設としての性格も有しており、東北縦貫自動車道の平泉前沢ICや観光地である平泉からのアクセス、周辺の景観などに配慮した結果、郊外の丘の上に立地している。そのため、児童が自ら来館することが難しいのが現状である。そこで、子どもと一緒に行動することが多いと思われる「お母さん」に注目し、子ども企画展の事業名称は、当初「お母さんと子どものための企画展」とした。しかし、父親を含む家族連れの来館も多いことから3回目には「親子で楽しむ企画展」となり、4回目以降からは、祖父や祖母と来館する子どもに配慮した結果、「家族で楽しむ企画展」となった。これは、牛博が立地する奥州市前沢区に3世代同居が多いことに加え、冬休みで帰郷した孫を連れてくる祖父母の存在など、農村部特有の

Table 2 子ども企画展の展示手法

- ① 壁面装飾に色画用紙を用いる
- ② キャラクターを作製して展示室内に配置する
- ③ 大人向け解説とは別に子ども向け解説板を作製する
- ④ 子ども向け解説板は話し言葉で標記する
- ⑤ 資料は出来る限り展示ケースに入れず開放型の展示とする
- ⑥ 参加型の装置を設置する
- ⑦ 触れることの出来る資料を展示する
- ⑧ 展示物および子ども向け解説板は子どもの目線に配慮する
- ⑨ 絵本コーナーなど休憩スペースを設ける

来館動向が影響したものである。

次に、メインタイトルには呼びかけや問いかけ表現に加え、鳴き声など子ども達が日頃から親しんでいる表現を採用した。これらは、親しみやすさを狙ったものである。しかし、子ども向け企画展示を初めて実施した平成10年度の「ウサギさんってどんな動物？ウシさんとくらべてみよう！」は、長すぎて新聞などマスコミに正式名称で取り上げられなかったことがなく、それ以降、短いワンフレーズのタイトルとしている。また、平成14年度に実施した「羊は牛ですか？」は動物分類学上の位置づけである「ヒツジはウシ科」であることを引っ掛けたもので、平成18年度に実施した「イノシシはブーと鳴く？」もイノシシとブタが同じ種であることを暗示したものである。このような学芸員の専門知識に基づいた言葉遊びを用いたタイトルは、どちらかというとマスコミに評判がよい。

3-3 展示方法

子ども、特に就学前児童を対象にした企画展示であることから、市内の幼稚園教諭に相談して検討を行った。その結果、Table 2に示したとおり9点に配慮して展示設営を行っている。

すなわち、①の色画用紙は色数が多くハサミやホチキスなどで加工が容易であることから、幼稚園の保育室などでも装飾に多用されている。色の組み合わせやデザインが自由であり、装飾にメッセージを込めることが可能である。牛博では特殊な場合を除いて展示の設営は、全て職員が自ら行っており、展示対象に合わせて色を選ぶなどの工夫を行っている (Fig.1)。また、幼稚園教諭によれば、子ども達は明るく柔らかい色画用紙の質感を好むことから、主に背景に明るい色を用い、注目してほしい箇所に原色を用いている。②のキャラクターは既存のものを無断使用すると著作権を侵害することから、毎年テーマとなる動物を取り上げて職員がデザインしている。オリジナルのキャラクターなので、表情やポーズを展示に合わせて自由に変えることが可能である。ポスターや看板をはじめ、展示室内の各所にキャラクターを配置することで子ども達に展示室に親しみを持たせる効果を期待している。③は解説板を分けることで、子どもに不必要な情報を省き、理解しやすくする効果がある。一方、それだけでは大人には不十分であることから大人向け解説板を設置し、子どもの質問にも答えられるだけの情報を提供した。④は読み言葉に慣れていない幼児や低学年児童が理解しやすいように配慮したもので、キャラクターと組み合わせる

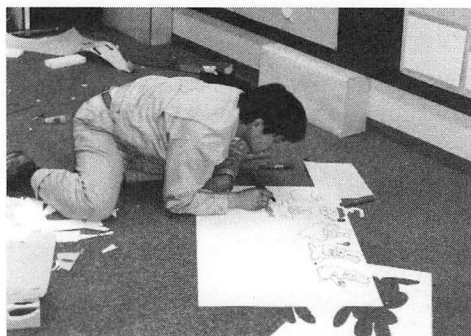


Fig.1 展示設営を行う学芸員



Fig.2 子供向け解説板

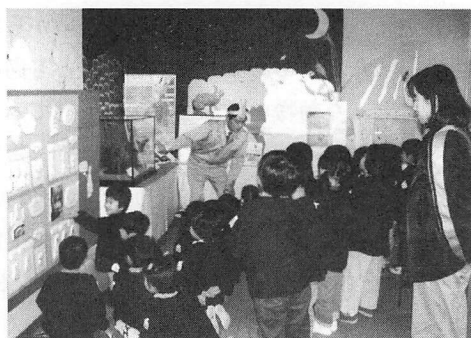


Fig.3 低めに設置したクイズコーナー

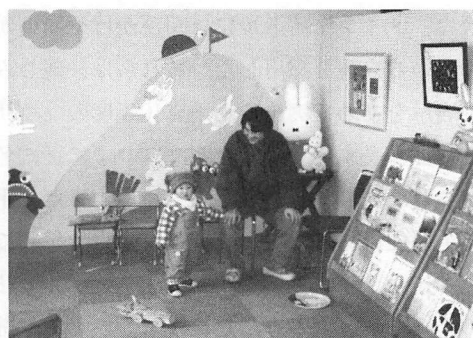


Fig.4 展示室内に設置した休憩コーナー

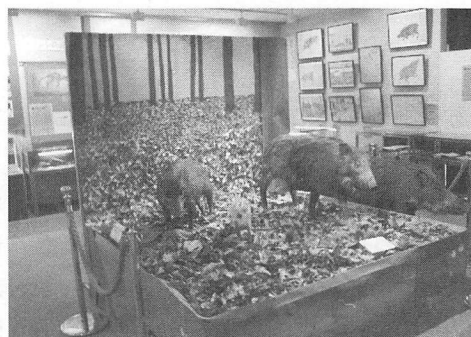


Fig.5 展示室中央に設置したシンボル展示



Fig.6 昭和30年代を再現した餅つき

ことでさらなる効果を期待している (Fig.2)。⑤の開放型展示は、ガラスを取り除くことで精神的な障壁も取り除き、資料への関心を高めることを期待している。しかし、この場合、来館者が資料に触れることがないように十分な距離を確保する必要がある。⑥として、めくると答えがわかるQ & Aコーナーを設置した。このコーナーでは、家族で質問を出し合って楽しむ姿が見られた。⑦の触らせる資料は企画展のテーマに沿って選定を行い、展示している。ヒツジ年の企画展では様々な品種のムートンに触れていただき好評であった。⑧は展示台を30~40cmと低めにした他、Q & Aも同様に低めに設置して子どもの目線に合わせたものである (Fig.3)。⑨の絵本コーナーでは、企画展のテーマとして取り上げた十二支の動物が登場するお話の一場面を色画用

Table 3 家族で楽しむ企画展2007「イノシシはブーと鳴く？」の展示構成

コーナー名称	主な展示資料	対照する牛博の常設展示
・ブタの鳴きごえ	パネル	牛の映像はくぶつかん
・イノシシとブタのかたち	玩具、工芸品、コイン、花札、切手	郷土玩具、工芸品、切手、お金
・イノシシとブタのクイズ	装置	ウシ博士に挑戦
・くらべてみようイノシシ(ブタ)とウシ	ブタ全身骨格、ブタ・ウシ胃、ブタ・ウシ下顎骨、写真	牛の骨格、動物の歯、牛の胃
・イノシシとウシの関係	系統図、パピルサ・スンダイポイノシシ・ヒゲイノシシ・ブタ頭蓋骨	世界の野生牛
・イノシシの進化	メッセロプロドン全身骨格化石(複製)、ジャワイノシシ下顎化石(一部)	牛の進化
・日本のイノシシ	イノシシ剥製	日本のウシ(和牛)
・岩手のイノシシ	イノシシ形土製品、イノシシ出土骨、岩手県産イノシシ剥製	南部牛
・イノシシからブタへ	イノシシ・ブタ頭蓋骨、イノブタ剥製、写真	家畜化のはじまり
・日本のブタはどこから来た？	琉球篤真景(写真)、唐蘭館絵巻(写真)など	和牛の起源
・ブタの品種	理想体型模型、品種写真	世界のウシ
・日本人と猪・豚の肉	錦絵(びくにはし雪中)、本草綱目、イノシシ・ブタ肉(模型)	むかしの肉食、肉食元年
・ブタの安全を祈る	家畜守護札	牛の安全を願う
・イノシシを飼う	パネル	前沢牛を飼う
・イノシシとブタのおはなし	壁面装飾、ぬいぐるみ、絵本	—

紙で壁面に造作している。その前には幼稚園から借用した幼児用椅子を設置し、ぬいぐるみを置くなどして、家族でゆっくりとくつろげるように配慮した (Fig.4)。

3-4 展示プラン

十二支の動物とウシを比較するため、牛博の常設展示とほぼ同じ流れで展示を構成したが、子どもを展示室へ誘引するため、展示室入口にキャラクターを用いた造作を施したほか、入り口付近に玩具・工芸品の展示やQ & Aコーナーを設けた。また、展示室中央には、シンボル展示として十二支の動物の剥製をジオラマ展示するなどして印象的な空間を設けた。このシンボル展示は、マスコミの取材の際に展示室の撮影ポイントとなることから、背景となる展示コーナーも含めて見栄えを考慮したうえで設置している (Fig.5)。

なお、展示手法は前述したとおり主に就学前児童に配慮したものであるが、その名称が家族で楽しむ企画展であることから、大人も楽しんで観覧することができるように展示資料は出来る限り実物とした。平成18年度に実施した「イノシシはブーと鳴く？」では、剥製や骨などの標本のほか、岩手県内で出土したイノシシ形土製品、本草綱目などの古書類や錦絵などの学術資料の展示を行った (Table 3)。

4. 来館者の反応

牛博で開催してきた子ども企画展は、平成18年度で9回を数え、市民に定着しつつある。開催期間が来館者の減少する冬季であり、家族で楽しむと銘打っているためか平日の来館者はそれほど多くないが、休日には親子連れでの来館が多く、牛博の常設展示と比較すると、展示内容を子どもに解説する親や展示について親にたずねる子どもが頻繁に観察された。さらに、幼稚園での来館が顕著に増加することが本展の特徴である。牛博が立地する奥州市前沢区の全ての公立幼稚

Table 4 月別幼児入館率※

	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
4月	4.4%	5.8%	2.2%	3.8%	4.8%
5月	5.9%	4.5%	4.2%	4.8%	4.4%
6月	3.5%	4.2%	3.7%	2.0%	1.3%
7月	2.9%	3.9%	3.2%	5.5%	5.1%
8月	6.0%	4.7%	5.2%	5.9%	4.2%
9月	4.1%	3.7%	3.3%	4.3%	1.6%
10月	3.3%	3.7%	3.2%	2.5%	3.8%
11月	2.9%	4.6%	3.4%	3.2%	2.6%
12月	3.8%	16.1%	13.4%	10.5%	12.7%
1月	10.5%	6.5%	10.8%	11.9%	9.4%
2月	3.4%	10.9%	7.4%	2.8%	4.2%
3月	5.5%	5.1%	5.4%	4.5%	5.5%
年平均	4.5%	5.3%	4.9%	4.5%	4.2%

※) 全体の入館者数に占める幼児入館者数の比率

※※) 矢印は子ども企画展の会期を示す

園が幼稚園バスを活用して毎年来館し、1時間あまりにわたって学芸員の解説を聞きながら博物館での学習を楽しんでいる。この際、学芸員らは企画展示キャラクターのお面をかぶるなどして、楽しい雰囲気に対応にあたっており、幼稚園教諭から高く評価されている。その結果、子ども企画展開催期間中の入館者数に対する未就学児童の割合（以下、幼児入館率）は明らかに高くなっている。平成18年度においては、年度全体の幼児入館率は4.2%であるが、月別でみると12月は12.7%、1月が9.4%となっており、この傾向は子ども企画展を実施した全ての年度で認められた（Table 4）。しかし、平成18年度から市の方針で公立幼稚園の運転手が非常勤職員となり、登園と降園のときにしかバスを運行しなくなったため、今後の幼稚園児の来館に影響が出ることが懸念される。

子ども企画展の会期中に開催する体験事業「十二支の動物の絵本読み聞かせと餅つき」は当初の参加者は十数名であったが、ここ5年程は100名を超す親子連れが訪れる人気行事のひとつとなった。この事業は地元の図書館で活動を行っている絵本読み聞かせボランティアと牛博ボランティアの協力を得て実施しているもので、これらの団体の集客力に加え、博物館職員による昭和30年代の衣装や道具を忠実に再現した餅つきが人気を呼んでいる（Fig.6）。牛博では体験事業において使い捨てをしないことを方針としており、つきたての餅は漆塗りの椀と箸で試食していただいている。これは子どもの情操教育に配慮したものであり、参加児童の親から高い評価を得ている。

また、本展は年頭挨拶の情報集めや年賀状の素材集めのために毎年期待して来館する大人も多い。特に地域の区長や各種団体の会長などが企画展示の開催に合わせて来館しているようである。十二支の動物についてわかりやすく簡潔にまとめてあり、理解しやすいとの意見が多く聞かれ、子ども向けの展示方法についてもおおむね好意的に受け止められている。しかし、これだけよい資料は、もっと落ち着いた環境で見たかったとの意見もあり、別の機会を設けて展示するなどの

対応策も必要と思われる。

5. おわりに

本稿では、主に牛博が子ども企画展を実施するに至った経緯とその概要及び来館者の反応について報告した。未就学児童が牛博の子ども企画展示においてどのような影響を受けたのか、残念ながらその成果について検証することはできなかったが、幼稚園教諭に聞き取りによる調査を行ったところ、色紙を用いた装飾とお面をつけての解説は共通して高く評価されていた。しかし、対応する職員によっては、話し方が子ども向けではなかったとする意見もあり、年代別解説マニュアルを作製するなどの改善が必要と思われた。

前述したとおり本展の設営は全て職員による手作りで行われている。展示物や展示装置に目を輝かせている子どもを見ると、私たち博物館職員が元気づけられ、次の事業への意欲が湧いてくるように思える。今後さらに、子ども企画展に改善を加え、実施していくとともに、地域に不可欠な博物館として誰からも認められるように努力していきたい。

引用参考文献

- Falk J. H. and Dierking L. D. 1992 'The Museum Experience' Whalesback Books
- 井上由佳 2007「歴史系博物館における子どもの学びの評価：事前・事後調査を中心に」博物館学雑誌第31巻第2号 全日本博物館学会 pp.75-100.
- 兼松重任・川田啓介・黒澤弥悦・佐々木義之 1997「岩手県南地方における黒毛和種の産肉性に関する遺伝的評価」食肉に関する助成研究調査報告書第15号 財団法人伊藤記念財団 pp.230-235.
- 兼松重任・川田啓介・黒澤弥悦・佐々木義之 1998「岩手県南地方における黒毛和種種牛の産肉性に関する遺伝的評価」食肉に関する助成研究調査報告書第16号 財団法人伊藤記念財団 pp.201-206.
- 兼松重任・川田啓介・黒澤弥悦・佐々木義之 1999「岩手県南地方における黒毛和種の地域別分集団の集団構造」食肉に関する助成研究調査報告書第17号 財団法人伊藤記念財団 pp.194-197.
- 川田啓介・兼松重任・黒澤弥悦・揖斐隆之・佐々木義之 2003「岩手県南地方における黒毛和種集団の産肉性形質に関する統計遺伝学的解析」日本畜産学会報第74巻第2号 日本畜産学会 pp.187-193.
- 川田啓介・黒澤弥悦・阿部正勝・高野教導・岩淵亜希・兼松重任 2003「介護老人福祉施設および介護老人保健施設における移動展示の試み」博物館学雑誌第29巻第1号 全日本博物館学会 pp.1-10.
- 倉本昌昭・許斐修輔 2006「社会への使命観と競争原理が理想的な運営への探求心を支える」カルチベイト第27号 文化環境研究所 pp.4-11.

黒澤弥悦2000「建物先行型の博物館創り－標本の収集と展示，そして活動の実践－」哺乳類科学
第40巻第1号 日本哺乳類学会 pp.51-60.